

り獨自の發展をなし、戰國時代には此の信仰により保護せられたる局外中立の安全地帯を形成し、遠近よりの參詣者も雲集して股賑を極め、富豪も多く質商人も居住せしことが太閤記にも見え、當時經濟上優越の地位にあつたことが察せられる。而して明治以後に於いては尾西毛織物の一中心地として前途多き工業都市を約束してゐることである。

尙一言すべきは津島神社々家を中心とする國學殊に和歌の發達である、尾張藩主より豊かなる社領を受けて風流韻事を友とする祠官中其の代表的なるは歌人として氷室長翁、禪道家として眞野時綱の名を擧ぐべきであらう。

以上は同町史の片鱗を窺つたに過ぎぬ。只其の望蜀としては、津島神社を中心とする民間信仰及び全國的に殊に關東に多く弘れる津島信仰と講社との關係又全體として今少しく根本史料を増加されたきこと、及び町史年表・索引を附載されたきことでもである。

しかし之は其の跋文にある如く、僅々一ヶ年の歲月により、此史の大冊を完成された若山氏の努力に對しては感謝すべきである。(菊判、本文九一四頁、圖版七三、附録地圖二、昭和十三年十二月、愛知縣海部郡津島町役場發行、頒價四圓)(田中善一)

石造美術

川勝政太郎著

昭和十年同じ著者によつて「石造美術概説」といふ珍らしい本が

出版された事があつた。それは石造美術の開拓者であり、且つパイロットである著者が、他の追従者のために入門手引の書物として世に提供せられたものであつたが、今回別上梓された「石造美術」は、今著の後に於いて著者が新に研究を加へられたものを補ふと共に、新なる研究分野を指されたもので、此の方面唯一の好書たる事は言ふまでもない。

第一章緒言、第二章石造美術の意義及種目、第三章石造美術の研究、第四章材料及製作、第五章石造美術の沿革、第六章各種目の形式及變遷、第七章主要細部の様式手法、第八章石大工、第九章刻銘、第十章石造美術の保存

の十章目から成立するが、就中、第四章、第七、九章は新に加へられたものであるだけに、著者今回の出版が、此の部分に世に問はんとされたものである事は、勿論であらう。私は其の中でも第四章と第八・九章を興味深く讀んだ。

思ふに我國の如きは石造美術のためには最も恵まれない天地である。材料としても極めて堅くしかも風には弱く御影石が殆んど唯一のものである上に、海洋國の常として國土殆んど浸潤、加ふるに雨量の極めて多き事は、石造美術の保存に最も不適當な國である。しかもかゝる天與の恩恵最も貧弱なる我國に、かくも多數の石造美術品を遺存して居る事は、全く皇威の隆替少しも無かつた事と國民の愛郷心のおかげであると思ふ。そしてそこにも國史の一美點が見出されてゐると思ふ。

石造美術そのもの、沿革、手法の變異は私の知る所でない。路

